

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 29 日現在

機関番号：32635

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380770

研究課題名(和文)わが国におけるソーシャルワーク価値の基礎的研究 仏教者の実践を通して

研究課題名(英文)Basic study of the value of social work of our country. From the practice of the scholar of Buddhism.

研究代表者

新保 祐光 (Shimpo, Hiromitsu)

大正大学・人間学部・准教授

研究者番号：90513432

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：1) 仏教思想と社会福祉実践の価値との関連を検討するために、日本仏教社会福祉学会の会員に対してアンケート調査をおこなった。その結果、仏教思想に基づく概念を用いて説明し直した方がより日本の実践に馴染みやすい社会福祉実践の価値として「人々のエンパワメント」「社会結束」があげられた。

2) 海外の仏教者の社会福祉実践とその価値について、ネパール、タイ、スリランカ、ベトナムの研究者とおこなわれた国際フォーラムに参加し意見交換をおこなった。また、タイ、中国、日本の仏教者に社会福祉実践に関するインタビューもおこなった。その結果「縁起」という概念が社会福祉実践の価値に関連が強いことが分かった。

研究成果の概要(英文)：A questionnaire was sent to members of the Japan Buddhist Social Work Society to investigate the relationship between Buddhist thought and the value of Social Work practice. According to the responses to the questionnaire, instead of the concepts of “empowerment” and “social unity,” the use of Buddhist concepts would be more appropriate for Social Work practice in Japan.

There was an exchange of ideas at an international forum of scholars from Nepal, Thailand, Sri Lanka, and Vietnam concerning the value of Social Work practices. There were interviews with Chinese, Thai, and Japanese Buddhists about Social Work practices. There is a strong relationship between the Japanese Buddhist concept of “engi” (the interrelatedness of all things) and Social Work practices.

研究分野：社会福祉

キーワード：ソーシャルワーク 仏教思想 価値

1. 研究開始当初の背景

ソーシャルワークの価値は、国際ソーシャルワーカー連盟 (International Federation of Social Workers: 以下 IFSW) の定義にある「人権と社会正義」がグローバルスタンダードである。ただし、国や地域、文化によって、人間観、社会観、正義観等が異なるため、ソーシャルワークの価値は、専門職としての普遍性を検討するグローバルな視点と、その国や社会、文化の特性を尊重するローカルな視点の双方を併せ持つ、グローバルな視点 (山脇 2004) で捉えるべき対象といえる。

これは、研究開始後 (2014) に改定されたソーシャルワークの国際定義のなかで、グローバル定義だけでなく、国や地域による独自の展開も尊重されることが明記されたことから裏付けられる。そのため、それぞれの国に応じたソーシャルワークとは何かについての検討をすることが求められている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ソーシャルワークのグローバル定義を踏まえううえで、わが国の地域文化に応じたローカルな価値は何かを検討することである。わが国のソーシャルワークの価値を考えるうえで、近代社会事業からの成り立ちを踏まえれば、仏教思想の影響を看過することは出来ない。本研究の最終目的は、仏教者の立場からわが国のソーシャルワークの価値とは何かを検討し、それらを提示することである。

3. 研究の方法

(1) 研究の全体構想

はじめに、ソーシャルワーク価値を仏教思想と関連づけて検討するにあたり、実際にそれが可能なのか、またどのような概念がわが国の社会福祉実践に有用なのかを検討する手がかりを得るために、日本仏教社会福祉学会の会員に対してアンケート調査をおこなった【図1、2】。

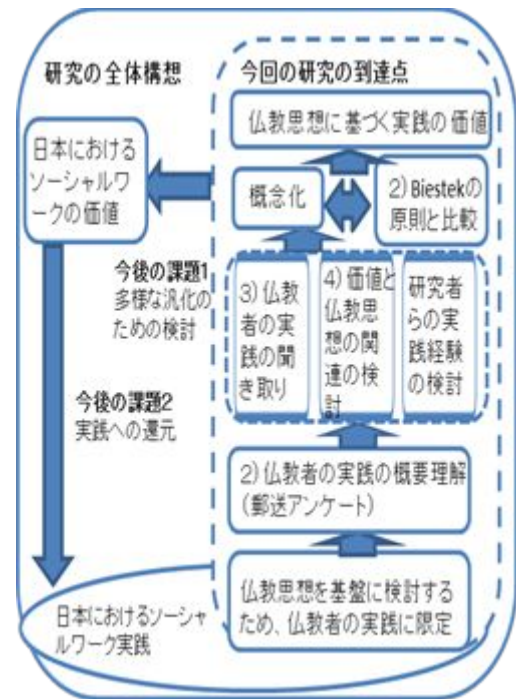
ソーシャルワークの価値についての設問では、まず、今回改定された国際定義のキーワードと仏教思想との関連を聞いた。抽象的な概念であるキーワードを日本における実践に応用する際に、仏教思想を用いた説明が可能かどうかをきくことで、ソーシャルワークのキーワード (重要な概念) と仏教思想の関連について検討した。

さらに価値は抽象的で、言語化しにくいいため、本調査では日本のソーシャルワーク教育のなかで、長い間実践者の基本原則 (専門職としてあるべき態度、望ましさとしての価値) として教えられている「バイステイクの原則」との差異を問うことで設問を答えやすく、かつ、回答に均一性をもたせるようにした。

この「バイステイクの原則」と対比するのは、この原則は1950年代のキリスト教倫理観の強い影響のもと作られた原則であり、宗

教思想の影響を考えるうえで対比しやすい原則なためである。

図1: 研究の全体構想



ただし仏教思想に基づく価値は、「バイステイクの原則」との対比だけに限定されない可能性がある。そのため、最後に自由記述欄を加える。日本におけるソーシャルワーク価値を検討するうえで、まずは今回改定されたソーシャルワークの定義のキーワード、及びバイステイクの原則のなかにみられるソーシャルワーク価値が、日本文化に適するかどうかについての意識調査を、日本仏教社会福祉学会会員に対しておこなった。

そのうえで、より実践と仏教思想の関連を具体的に知るために、仏教者に対して聞き取り調査をおこなった【図1、3】。当初、国内の仏教者に聞き取りをおこなったが、宗派による概念定義の違いや、仏教、社会福祉実践双方に関する理解の差異も多く、聞き取り、及びまとめ作業が困難になった。

そのため、仏教思想との関連を強調するためにも、仏教国における仏教者の社会福祉実践について聞き取ることにした。

具体的には、仏教ソーシャルワークをテーマとした国際ワークショップ、及び国際フォーラムに参加した。そこでの議論を踏まえて、タイ、中国の仏教者に聞き取りをおこなった。

本研究は、この2つの結果を軸に、そのほかの研究や学会発表などで得られた知見を含めながら、総体的に検討することで今回の研究の結論とした。

(2) 日本仏教社会福祉学会会員に対するアンケート調査 調査概要

目的：わが国の地域、民族に応じたソーシャルワークの価値とは何かを検討する。

わが国のソーシャルワークの価値を考えるうえで、近代社会事業からの成り立ちを踏まえれば、仏教思想の影響を看過することは出来ない。そのため仏教者の立場からわが国のソーシャルワークの価値とは何かを検討する。

対象：日本仏教社会福祉学会の全会員に対するアンケート調査（全数調査）

内容：

- a. 基本属性（性別・年齢・宗派・専門領域・職歴等）
- b. 2014年に改定されたソーシャルワークの「グローバル定義」のキーワードに関して、仏教思想を用いて説明することの望ましさに関する意識を4件法で調査した。望ましいとする場合には、説明に適切な仏教思想の記述を求めた。
- c. 「バイスティクの7原則」に対する違和感の有無を5件法で調査した。違和感をおぼえる場合、その内容の記述を求めた。

* 上記Bは「望ましさを問う」という意図から中央値（どちらでもない）を省く4件法とし、Cは中央値を配慮するために5件法を用いた。

回収率：23.1%（配票総数 199、回答数 n:46）

分析方法

本調査は、有効回答数が少ないために統計解析による検討がそぐわないことから、単純集計、クロス集計のみを実施した。今回特に重視した自由記述欄に関しては、各回答を丁寧に読み込むことに加えて、自由記述の内容を全体の傾向として捉えるために、KH Coder（Ver.2.beta.31）を用いて、一つの文脈頻出語の抽出、各回答を特徴づける関連語の分析、抽出された語の用い方（元の文脈）の比較検討をおこなった。これは丁寧な読み込みだけでは、分析者の立場や知識によってその内容分析にバイアスがかかることがあり得るため、自由記述欄に示された概念や単語の頻度及び関連を可能な限り客観的に把握するよう心掛けた。

（3）仏教徒の実践の聞き取り

目的：仏教者の社会福祉実践の価値について、インタビューを用いて調査することによって、相互理解に基づき確認をしながら、より深く内容を知る。
対象：当初、アンケート調査のなかでインタビュー協力に同意を得られた会員に対して調査をおこなったが、宗派ごとの概念定義の違い等に基づく聞き取り、及び整理の困難性が明らかにな

った。そのため、国内ではなく国外の仏教者の聞き取りへと対象を変更した。国際ワークショップ、国際フォーラムにおいては、タイ、ネパール、スリランカ、ベトナムの研究者とディスカッションをおこなった。

タイ、中国では、寺院でおこなわれている実践について、現地でインタビューをおこない、かつ実践を観察した。

内容

- a. 社会福祉実践の具体例（どんなことをしていますか？）
- b. 仏教思想との関連を中心にした社会福祉実践の動機（それは何故おこなうのですか？）
- c. おこなわれている社会福祉実践の代表性（それは、他の仏教者もおこなっていますか？）
- d. 今後の実践の展開について

（4）価値と仏教思想の関連について
日本仏教社会福祉学会における発表同様の問題意識を持つ研究者を招聘し、研究会を実施

4. 研究成果

（1）日本仏教社会福祉学会会員に対するアンケート調査
単純集計の結果

a. ソーシャルワークのグローバル定義
ソーシャルワークの定義に仏教思想を用いることに関しては、90%以上が可能であると回答した。そのなかでも22%が仏教思想を用いることが望ましいとの回答であった。

ソーシャルワークのグローバル定義のキーワードを仏教思想を用いて説明し直すことの望ましさに関しては、「望ましい」とする積極的支持と、「困難」「不可能」とする否定の二つの回答に特に注目した（そのほかの回答は「可能」という消極的支持）。

その結果、「人々のエンパワメント（積極的支持20%：否定7%）」「社会結束（積極的支持25%：否定9%）」「多様性尊重（積極的支持18%：否定7%）」の3項目に関しては、積極的支持が否定を10%以上上回り、かつ否定が10%以下であった。これらの項目は、仏教思想を用いた説明が望ましいとされる概念であろう。

反対に否定が積極的支持をうわまわったのは、「社会正義（積極的支持7%：否定23%）」「人権（積極的支持14%：否定20%）」「集団的責任（積極的支持14%：否定16%）」の3項目である。とくに「社会正義」「人権」は否定が20%を超え、積極的支持を大きく上回

っているだけでなく、他の項目に比べて未回答の割合も高く、仏教思想を用いた説明は困難だと思ふ会員が多いことが顕著に示されている。

残った「人々の解放」は、積極的支持 11%、否定 9%と大きな差がなく、また支持が 75%と他と比べて大きかった。このように質問した 7 項目を全体的に捉え直すと、積極的支持と否定に関する意識が、キーワードによってある程度明確に分かれた結果となった。

b. バイステイクの原則

バイステイクの原則への違和感については、すべての原則で「感じていない」、「支持する」が 75%を超えていた。あえてあげれば、「個別化」、「自己決定」の 2 項目が、他の原則より少し違和感がある割合が高かったと言えよう（約 15%）。ただし、実践経験 10 年以上に限れば 50%近くに違和感があった。この実践経験があり、かつ違和感がある人々に焦点をあて、その違和感を掘り下げていく必要がある。

自由記述欄

a. 丁寧な読み込み

多くの回答は、こちらが理解しやすいように丁寧かつ詳細に記述されていた。ただし、やはり宗派、個人によって用いる概念や説明の仕方が異なることが多かった。当然、文章も一貫性のある記述となっているので、中途半端な切り取りや、カテゴリー化は反対に正確な理解を妨げると判断した。つまり読み込みの結果は、そのすべてがソーシャルワークの価値に関して多様な多くのご提案をいただいたとするのが妥当であると判断した。

b. KH Coder (Ver. 2. beta. 31) による分析

今回は、全回答の文章を一つまとまりとして分析したパターンと、質問項目の自由回答欄をそれぞれ区分(17区分)して分析したパターンと、ソーシャルワークの定義とバイステイクの原則の大項目二つに区分して分析したパターンの 3 通りを試みた。

まず全回答を一つのみまとまりとしてみたパターンであるが、「社会」「仏教」「思想」の 3 つが大きな円(頻度が高い)でかつ重なりあっている(関連が多い)ことが分かる。自由回答欄をそれぞれ区分したものからは、人間(人)と関連の多いキーワードとして、「仏性」、「縁起」、「社会」などがあることが特徴と言える。大項目を二つに区分したパターンでは、大きな円に「菩薩」、「寂光土」などの仏教概念だけでなく「環境」、「自然」があるのが特徴である。

考察およびまとめ

以上の結果から、ソーシャルワークの価値を仏教思想と関連づけて考えていく際に手がかりとなるのは、「人々のエンパワメント」「社会結束」であろう。この 2 つは意識調査でも仏教思想に基づいて説明をし直すことが望ましいとする割合が多かった項目である。かつ KHCoder でも、人や社会が、縁起、仏性、環境、自然など、グローバル定義とは異なる言葉との強い関連が示されている。今後は、この二つの概念に関する自由記述をより丁寧に読み込み、必要があればインタビュー等の追加調査をおこなう必要がある。

またバイステイクの原則を仏教思想を用いて説明し直すことについては、今回明確な手がかりが得られたとは言い難いが、実践経験 10 年以上の人が違和感がある割合が高かった「個別化」、「自己決定の原則」については、さらに検討を深めていくことを今後の課題とする。

(2) 仏教者に対するインタビュー

社会福祉実践の具体例の聞き取りでは、すべての国の仏教者は、個人の内面へのカウンセリング等のミクロレベルの実践から、地域の相談、教育、医療、またはライフラインなどの住環境の整備を含めたメゾ・マクロレベルまで、多様な領域での実践報告があった。また妊娠時における関わりから、いかにその人らしく亡くなるかまでの、まさに生・老・病・死、ライフサイクルすべてに関わる良い実践例が数多くあることも報告された。

仏教者による優れた社会福祉実践は、どの国でも共通しておこなわれており、仏教ソーシャルワークは、アジア地域においては汎化可能性の高いことが示唆された。

ただし仏教徒が多数を占め、仏教が日常生活の一部となっているこれらの国々、今の日本の宗教に関わる現状、さらに、仏教のなかでも宗派仏教の側面も強い日本を、これらの国々と同じ前提で考えることについては、慎重にあるべきであろう。

社会福祉実践をおこなう動機については、この答えは、まさに仏教の教えを実践しようという動機であった。仏教の教えとは、例えば、美德、苦からの解放、慈悲、施し等であった。たとえ一見仏教とは関係のない個人的な理由であったとしても、その内容を掘り下げれば、師僧の影響であったりと、仏教との関連が必ずあった。

この教えに基づく実践を顕著に示したのは、「僧侶が社会福祉実践をおこなうことで、金銭的報酬を受け取ることがあるのか」という質問に対して、「僧侶は社会福祉実践の対価として、給料を受けとらない。受けとる場合は、僧侶を辞めることが前提である。」という回答があったことによる。

基本的に僧侶による社会福祉実践は宗教行為であり、決して個人として、またはソ-

シャルワーカーとしての専門職実践の対価として、報酬を得ようとする経済行為ではないことを示している。

多くのアジアの国は、宗教行為の中にソーシャルワークが包含されていると考えられた。ただし日本では、宗教行為とソーシャルワークの重なる部分はあるが、包含はされていない。別の専門職実践であり、基本的には報酬を得る活動である。この包含する、しないの違いは、仏教ソーシャルワークを考える上で重要な検討事項だと考えられた。

また仏教者の社会福祉実践の課題として、3つのことが指摘された。1つめは多様性の尊重には障壁がある。たとえば、僧侶の地位の高さや、女性への対応の問題である。2つめは宗教行為の一環のため、経済的な基盤が不安定なことである。また実践の内容も個人的力量による。つまり、計画性、継続性、普遍化に問題がある。3つめは、宗教行為としての善行は、必ずしも対象者のニーズと合致するとは限らない。つまり提供者側の行為の動機を中心であり、根拠や効果測定など、科学的根拠に基づかない実践である可能性もあるということである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

鷲見宗信(2016)「矢吹慶喜の社会事業実践について」査読有、鴨台社会福祉学論集.25巻,p1-8.

新保祐光(2015)「石川到覚教授の研究を通してみる大正大学社会福祉研究の思想 平等観、凡夫観、仏道観の3つの仏教概念を根底に、関係性の中からアプローチする」査読有、鴨台社会福祉学論集.24巻,p44-50.

石川到覚(2015)「社会福祉実践の協働循環モデルを求めて」査読有、鴨台社会福祉学論集.24巻,p1-7.

[学会発表](計3件)

新保祐光・石川到覚・鷲見宗信・吉水岳彦・田中美喜子・浅沼太郎(2015)「わが国におけるソーシャルワーク価値の基礎的研究」日本仏教社会福祉学会、2015年10月10日、淑徳大学(千葉県千葉市)

石川到覚(2015)「アジアのソーシャルワークにおける仏教の役割」日本仏教社会福祉学会、基調講演、2015年10月9日、淑徳大学(千葉県千葉市)。

新保祐光(2015)「アジアのソーシャルワークにおける仏教の役割：共通基盤の構築に向けて」日本仏教社会福祉学会、シンポジウムコメンテーター、2015年10月9日、淑徳大学(千葉県千葉市)

[図書](計1件)

石川到覚(2016)「アジアのソーシャルワークにおける仏教の役割」『仏教ソーシャルワークと専門職ソーシャルワーク』淑徳大学長谷川仏教研究所、73-82(総88頁)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

新保 祐光(SHIMPO,Hiromitsu)
大正大学・人間学部・准教授
研究者番号：90513432

(2)研究分担者

浅沼 太郎(ASANUMA,Taro)
大正大学・人間学部・講師
研究者番号 30365853

鷲見 宗信(WASHIMI,Munenobu)
大正大学・人間学部・講師
研究者番号 40646915

石川 到覚(ISHIKAWA,Toukaku)
大正大学・人間学部・名誉教授
研究者番号 50119400

勝野 隆広(KATSUNO,Ryuko)
大正大学・仏教学部・准教授
研究者番号 60459253

吉水 岳彦(YOSHIMIZU,Gakugen)
大正大学・仏教学部・講師
研究者番号 10709885